

福島 子ども こらっせ 神奈川

[ミッション]

- * 子どもたちの未来のために健康と命を守りたい
- * 「交流」は生きる力を育む
- * 「フクシマ」を忘れない

[アクション]

1. リフレッシュプログラム：夏休みに福島の子どもたちを招き、自然の中で「こらっせユース」と一緒に遊んでもらいます。
2. 福島応援・スタディツアー：「こらっせユース」が福島に行き、子ども施設ボランティアをすると同時に被災地に赴き原発事故のことを学びます。
3. 山北プロジェクト：神奈川の子どもたちに自然豊かな山北で遊んでもらうとともに、森林や水のことを学びます。
4. その他の活動：講演会の開催、311子ども甲状腺がん裁判支援、省庁交渉などを通じて子どもの健康、人権を考えます。

スタッフ

事務局スタッフ

青木愛美・金子文夫・佐藤 聡・清水雅大・首藤天信・高橋おいどん・遠野はるひ・
錦織順子・蜂谷 隆・藤井あや子・山際正道・横山満里奈

ユーススタッフ

岩城千晴・岩淵朱莉・井手美由希・小林真子・瀬戸直美・林 千陽

『福島こども・こらっせ神奈川 活動報告書』

発行日 2024年11月20日

編集・発行 福島子ども・こらっせ神奈川

E-mail : info@korasse-kanagawa.org

WEB : <http://korasse-kanagawa.org/>

X(Twitter) : @korasse_kana

デザイン 高橋 晃



Web site

寄付をお願いします!

ご寄付いただいた方は領収書とニュースレターをお送りしたいので、お手数ですが住所とメールアドレスを事務局までお知らせください。

・銀行振込 横浜銀行 横浜駅前支店 普通預金 6305864

フクシマコドモ コラツセカナガワ

・郵便振替 口座番号 00270-7-101155

口座名称 福島子ども・こらっせ神奈川



報告書

福島

子ども こらっせ

神奈川

福島 子ども こらっせ 神奈川

12年間の活動を振り返り、 これからを考える

2011年3月11日の衝撃。多くの日本人が何かしたいと考え行動しました。「福島子ども・こらっせ神奈川」（「こらっせ」）は、福島っ子の健康を守りたい、「移動教室」のモデルに貢献しようと2012年4月に結成。①リフレッシュプログラムを柱に、②福島応援・スタディツアー、③山北プロジェクト、④その他の活動へと、実施するプログラムを広げてきました。

● 「移動教室」と双方向「交流」

子どもたちだけで避難する「移動教室」のモデルを作るには、行政、学生ボランティア、財政支援が必須。檜葉町と山北町から協力をいただき、大学生が「こらっせユース」に応募してくれ、賛同人からの賛同金とパルシステムを筆頭に複数の団体からの補助金を得て、毎夏、30人近くの檜葉っ子を神奈川の山北町に招待して遊び・学ぶことができました。

プログラムは、大学生と子どもたち、山北と檜葉の子どもたち、そして檜葉・山北の行政や地域住民、賛同・協力してくださる方々との世代を超えた双方向「交流」をうみだしました。「こらっせユース」が、春休み・夏休みに檜葉町の学童保育の応援に行くことになったのも「交流」からです。「神奈川に行けない小さな子どもたちとこちらで遊んでほしい」という現地の声を聞いた学生たちが自主的に行動しました。自然豊かな山北で、被災した福島で、紡がれていく「交流」の糸は「生きる力」を育んでいきました。

● 「山北プロジェクト」

「フクシマ」が風化しつつあります。マスメディアによる3.11の報道、保養記事も減少しました。そして、コロナ禍。2020年春から2年間、従来のプログラムを実施できませんでしたが、「山北プロジェクト」の企画を考えるチャンスとなりました。水、森林、気候変動など、世界が直面している大問題を考える宝庫である山北で、子ども食堂など地域の居場所に集う神奈川の子どもたちに遊び学んでもらおうという新プログラムです。

「山北プロジェクト」の準備として、2021年春、「若芽プロジェクト」を実施しました。これは、3.11の10周年追悼イベントと子ども食堂との連携を目的としたもので、岩手県に移住した元「こらっせユース」のメンバーが採ったワカメを購入・販売し、30カ所の「子ども食堂」にとどけました。山北をもっと知ろうとユースの山北ツアーをおこない、若者が現場に行くことが大切だと2022年から「福島スタディツアー」もスタートしています。

● これからの「こらっせ」

結成から12年、子どもや若者と向き合い確信したことは、国は被ばくによる子どもの健康被害と真摯に向き合っていない、子ども・若者の人権を守っていないということでした。

現実に目を向けると、シニアスタッフや賛同人の高齢化、ユーススタッフの就職等、多くの課題が山積しています。話し合いを重ねて出した結論は、①従来のプログラムは無理のない範囲で継続する、②省庁交渉に力をいれる、③賛同人制度はやめ「こらっせ便り」はメールで配信し、SNSでの発信に力をいれていくということです。

今後とも細く長く活動を続けていきますのでみなさま、ご支援をよろしくお願いいたします。

2024年10月

「福島子ども・こらっせ神奈川」事務局長 遠野はるひ

山北プロジェクト

2023年11月12日

山北で秋を見つけました。



茅ヶ崎の居場所「さろんどて」の子どもたち9人と山北を訪れ、大野山（723m）に登りました。茅ヶ崎を出発した時は雨でしたが、山北は曇り。つぶらの公園で自己紹介をしてから、出発です。



登山道には、花・木の実・動物の足跡など子どもたちの興味を引くものがたくさんあり、山北の自然を知り尽くしている「モミとカシ」のスタッフが説明してくれました。山頂で、山北のお母さんたちが作ってくれたお弁当を食べ、集合写真を撮りました。



ゴールは閉校した共和小学校に拠点を置くNPO「共和のもり」です。暖かい部屋で林業家の富田陽子さんから話を聞きました。子どもたちからもたくさん質問・感想がでました。



福島スタディツアー

2024年3月9日-10日

3月9日

3.11 東日本大震災・原発事故の足跡をたどり、現状を知ろうと、大学生10人とこらっせスタッフ3人で福島各地を訪れました。早朝、小型バスで横浜駅を出発し、向かったのは福島市の子ども福祉施設。子どもたちと交流し、ガイド役の今野寿美雄さん(子ども脱被ばく裁判原告団長)と合流した後、南相馬市にある双葉屋旅館に到着。



双葉屋旅館はフクシマを思う人たちの常宿。食事は放射線測定をされた食材で調理、夫婦で訪問したチェルノブイリ、この地・小高地区の写真が展示されていました。夕食の前に櫻井勝延元南相馬市長のお話を聞きました。櫻井さんは震災直後の市長としての対応と復興に向けての市政について語りました。熱い思いに若者たちは聞きっていました。



3月10日

双葉屋旅館に隣接する空き倉庫を改装した「おれたちの伝承館」では、写真家の中筋純館長が迎えてくれました。アートで原発事故を伝承しようと、様々な分野の芸術作品が飾られています。このツアーで若者たちが一番深い印象を受けたのが、これらの芸術作品でした。

福島
子ども
こらっせ
神奈川



浪江町の棚塩産業団地は、浜通りの復興をめざす国家プロジェクトである福島イノベーション・コースト構想の一部です。見晴台にあがると、水素製造工場、水素ステーション、高度集成材製造センター、ロボット・ドローン・テストフィールドなどが一望できます。



浪江町立請戸小学校は、15mの高さの津波に襲われながら、全員無事に避難することができた「奇跡の学校」といわれている震災遺構です。校舎にはいと壁や天井は剥がれて骨組みがむき出しになり、目を疑うような光景が広がっていました。

双葉町にある原子力災害伝承館では東日本大震災と原子力災害の資料を展示。3.11が起きた時は小学校に入学する前後だった学生たちは多くのことを知りました。



双葉町から国道6号線を南下する車内で放射線量を測定していると、一番高いところは1.6~1.7 μ Svが表示されました。富岡漁港から福島第2原発を望み、楢葉町の宝鏡寺にある伝言館に到着。宝鏡寺の伝言館には福島だけでなく広島、長崎、ビキニの資料も展示されていて、宝鏡寺住職で伝言館館長、故早川篤さんの反核・反原発・平和を訴える思いが伝わりました。

リフレッシュプログラム

2024年8月9日ー10日

今年のリフレッシュプログラムは山形での開催です。早朝、東京駅で待ち合わせた「こらっせ」メンバーは、新幹線で福島駅に到着。観光バスで子ども福祉施設へ行き、子どもたちを迎えると、山形県大江町にある「やまさあーべ」に向けて出発。小学生と中学生17人、スタッフ13人、総勢30人で2日間のプログラムを楽しみました。



8月9日

「やまさあーべ」(山形弁で「山へ行こう」)は、閉校になった小学校を利用した宿泊施設で、自然のなかで遊び・学ぶプログラムを企画しています。



最初のイベントは、川の水を利用したウォータースライダーです。上にあがると、思ったより高く傾斜があるので、最初は少し怖かったけれど、一步を踏み出すと大丈夫。次々と笑顔で滑り降りました。

シャワーを浴びてから、スイカ割り。「前、前!」「もう少し右」、掛け声が徐々に大きくなります。



グループに分かれ、火起こしをしてカレーづくり。

薪割りからはじめます。腕の太さの薪を割りばしの細さまで割ります。次は火起こしです。鉄板のうえに麻ひもをほどき、火をつけると、新聞紙をかぶせ薪を組んでいきます。風をいれて火を大きくしますが、みんな悪戦苦闘。



最後は鍋でカレーをつくりました。自分たちで作ったカレーはことさら美味で、カレーもご飯も足りなくなりました。



夕食の後はフリータイム。体育館では卓球やバスケットボールを。音楽室ではギターを練習したり、ドラムをたたいたりしました。「これで一緒に遊ぼうよ」、子どもたちは近くの大人を誘います。



寝る前のイベントは、みんなで花火大会です。「次は何をやるかな」、手持ち花火を選びます。最後の打ち上げ花火に、「もっと見たい!」

たくさん遊んで、疲れてぐっすり

福島
子ども
こらっせ
奈川

保養ネットワーク「いのち・神奈川」で省庁交渉

神奈川県15の保養団体のネットワーク、「いのち・神奈川」は、各省庁に福島っ子の保養と健康をテーマに、毎年、要請をおこなっている。「いのち・神奈川」は、情報交換をしようと2012年7月に結成された。地域で保養団体のネットワークを作り省庁交渉を続けているのは、全国で「いのち・神奈川」だけだと聞いている。

● 国からの補助金は高いハードル

当時、保養グループの間では「移動教室」を実現させようという機運がもりあがっていた。2013年5月、那谷屋正義参議院議員から、文教科学委員会で下村文科大臣に「移動教室」についての質問をするので、資料の提供をしてほしいという連絡が「こらっせ」にあった。委員会での質問の当日、「こらっせ」も傍聴をしたが、大臣の回答はとても前向きだった。翌6月には那谷屋議員の仲介で、「移動教室」実現に向けて文科省スポーツ青少年局と交渉をした。「いのち・神奈川」による第1回目の省庁交渉だ。

2014年度、文科省は3億6000万円の予算をつけ、「ふくしまっ子自然体験・交流活動支援事業」をスタートし、福島県と共催で2014年と2015年4月に、保養団体、県内の教育委員会、旅行会社に向けて説明会を開催した。

この事業には県内の団体同様に県外の団体も補助金を申請できるが、申請の条件として様々な制約があった。とりわけ高いハードルは、①県外で実施する場合は6泊7日以上以上のプログラム、②福島県内の社会教育団体が申請の当事者という条件で、実際のところ県外の団体はこの補助金を使うことは難しかった。

● 交渉の柱は「保養」と「健康」

「いのち・神奈川」による省庁交渉は、2014年11月27日に第2回目がおこなわれ、その後も継続している。当初は、「いのち・神奈川」も協力した「ふくしまっ子自然体験・交流活動支援事業」をモニターする責任があるということで、要請のメインは保養にフォーカスしていたが、2016年からは「保養」とともに「健康」、なかでも子ども甲状腺がんがもう一つの主要なテーマとなっている。

2023年度は年度内ギリギリの2024年3月に1回目、年度をまたいで5月に2回目の省庁交渉（文科省・厚労省・環境省・復興庁・経産省）を実施した。第1の柱である保養事業について拡充を要望するとともに、「ふくしまっ子自然体験・交流活動支援事業」に代わり、国（復興庁）の予算で福島県が実施している「チャレンジ!子どもがふみだす体験活動応援事業」の実施状況を質問した。第2の柱である健康に関しては、子ども甲状腺がん患者が370人以上に達していることを踏まえて質問・要請を提出。これに対する国側の回答は、甲状腺検査は福島県の「県民健康調査」検討委員会に任せている、福島県外での甲状腺検査や「健康管理手帳」創設は予定していない、UNSCEAR報告書は「科学的・中立的な立場から調査・評価」したものであり、その評価は「国内外の専門家の幅広い議論に委ねたい」などといった不十分なものだった。

交渉を通じて感じたのは、UNSCEAR報告書を前提として、前例踏襲によって福島県の専門家の見解に任せ、国として新しいことに取り組む姿勢がうかがえないことだった。今後も「いのち・神奈川」は省庁交渉を続けていくが、単独で取り組むだけでなく、関係する運動や訴訟との連携を図るとともに、交渉の持ち方を工夫していこうと思う。



8月10日

2日目は近くの田んぼや池で生き物さがしです。虫が大好きな虫博士がいます。虫に刺されないように、蛇にかまれないように長袖・長ズボン・長靴です。網を使い、池や田んぼで生き物を捕まえ、「やまさあーべ」に持ち帰りました。



捕まえた生き物の名前は誰もおしえてくれません。たくさんある図鑑や本から自分たちで協力して調べました。カエルやゲンゴロウ、どじょうなど18種類。絶滅危惧種のアカハライモリを見つけました。



昼食は山形の郷土料理の「ひっぱりうどん」です。めんつゆに納豆、鯖缶、ネギをいれた汁に、鍋からひっぱりきたうどんをつけて食べます。何回もおかわりしていました。

いよいよお別れです。子ども福祉施設で解散式をしました。また、会おうね。

福島
子ども
こらっせ
神奈川

「福島子ども・こらっせ神奈川」の歩み

2011年	3月11日	東日本大震災発生 東京電力福島第一原子力発電所事故発生
2012年	4月12日	「福島子ども・こらっせ神奈川」結成
	6月22日	いわき市の榎葉町教育委員会と榎葉小・中学校を訪問し協力依頼
	7月8日	神奈川の保養ネットワーク「いのち・神奈川」立ち上げ集会
	8月7-11日	「神奈川・横浜リフレッシュプログラム」実施
2013年	4月10-11日	山北町に湯川山北町長、石田教育長を訪問、丹沢荘に宿泊
	5月9日	参議院文科委員会で那谷屋議員が下村文科大臣に「移動教室」を質問
	6月24日	「いのち・神奈川」文科省と初めての省庁交渉 要請文を提出
	8月5-9日	「横浜・山北リフレッシュプログラム」実施
	10月25日	「こらっせ便り」発行をスタート
	11月5日	「いのち・神奈川」文科省と省庁交渉
	11月10日	榎葉中の文化祭「ゆずり葉祭」に事務局スタッフが参加
2014年	4月8日	文科省と福島県「ふくしまっ子自然体験交流活動」説明会開催
	4月27日	いわき市「空の家」で「こらっせ交流会」を開催
	8月6-10日	「横浜・山北リフレッシュプログラム」実施
	11月9日	「ゆずり葉祭」参加と榎葉町ツアー
	11月27日	「いのち・神奈川」文科省と省庁交渉
2015年	3月26-27日,30-31日	榎葉町学童保育応援(いわき)
	4月7日	福島市で「ふくしまっ子自然体験交流活動」説明会開催
	8月3-6日	「横浜・山北リフレッシュプログラム」実施
	8月10-11日	榎葉町学童保育応援(いわき)
	11月24日	「いのち・神奈川」省庁交渉(文科省・復興庁)
2016年	3月29-30日	榎葉町学童保育応援(いわき)
	8月2日	榎葉町学童保育応援(いわき)
	8月3-5日	「横浜・山北リフレッシュプログラム」実施
	8月22-23日	榎葉町学童保育応援(いわき)
	10月17日	「いのち・神奈川」文科省と省庁交渉
2017年	3月23-24日,29-30日	榎葉町学童保育応援(いわき)
	8月7-9日	「横浜・山北リフレッシュプログラム」実施
	8月17-18日,21-22日,22-23日	榎葉町学童保育応援(榎葉)
	12月12日	省庁交渉(復興庁・文科省・環境省・厚労省・国土交通省)
2018年	3月27-28日,4月3-4日	榎葉町学童保育応援(榎葉)
	8月6-8日	「横浜・山北リフレッシュプログラム」実施
	8月20-21日	榎葉町学童保育応援(榎葉)
	11月28日	省庁交渉(復興庁・文科省・環境省・厚労省・国土交通省)
2019年	4月2-3日	榎葉町学童保育応援(榎葉)
	8月5-7日	「横浜・山北リフレッシュプログラム」実施
	8月19-20日,22-23日	榎葉町学童保育応援(榎葉)
2020年	1月11日	省庁交渉(環境省・文科省・復興庁・国交省・原子力規制庁)
	10月18日	山北ツアー
	11月11日	省庁交渉(新型コロナウイルス流行のため文書要請のみ)
2021年	3月10日	山北ツアー
	3月~5月	「希望の若芽(ワカメ)プロジェクト」実施
	11月18-19日	山北ツアー
	11月21日	講演会:加藤彰彦「子どもたちの未来のために一沖繩・神奈川」
	12月20日	「いのち・神奈川」で省庁交渉(文科省・環境省・復興庁)
2022年	3月21-22日	福島スタディツアー
	4月3日	講演会:鴨下一家「原発事故から11年、自主避難家族の思うこと」
	6月4-5日	山北プロジェクト
	8月17日,9月2日	福島スタディツアー
	8月18日,9月3日	「福島リフレッシュプログラム(裏磐梯)」実施
	8月17-18日	福島応援・スタディツアー(榎葉)
	12月13日	省庁交渉(経産省・文科省・厚労省・環境省・復興庁)
2023年	1月29日	講演会:江藤大裕「子どもたちをつなぐで包み込むまちへ」
	3月28-29日	福島スタディツアー
	5月14日	講演会:井戸謙一「子ども甲状腺がんは原発事故のせいではないの?」
	8月7-9日	「横浜・山北リフレッシュプログラム」実施
	11月12日	「山北プロジェクト」実施
2024年	3月9-10日	福島スタディツアー
	3月26日	2023年度省庁交渉(文科省・厚労省・環境省・復興庁・経産省)
	5月30日	2023年度省庁交渉第2回(厚労省・環境省・復興庁)
	8月9-10日	「山形リフレッシュプログラム」実施

ネットワークに支えられて

「こらっせ」は、神奈川の保養グループと、「いのち・神奈川」というネットワークを結び、お互いに支えあっていますが、他にもいくつかの団体に賛同したり、実行委員会に参加したりしています。

● 「追悼の夕べ」と「こらっせ」

2011年3月11日に起きた東日本大震災は、地震のみならず巨大な津波や震撼すべき原発大事故を伴った、複合的な大災害でした。この災害で命を落とされたすべての人々の鎮魂を祈る「東日本大震災かながわ追悼の夕べ」が、2014年から3月10日に、大通り公園や象の鼻パーク、今年は横浜市役所アトリウムを会場に、毎年途切れることなく日暮れと共に開かれてきました。横浜の市民達の手による1000本を超えるキャンドルの献灯、詩の朗読、美しい歌姫による「祈りの歌」などしめやかに執り行われています。

「こらっせ」はこのイベントがスタートしたときから実行委員会に参加し、ブースをだし写真の展示や報告書の配布をおこなってきました。複数の原発の爆発という世界でも類を見ない過酷な環境のもとで生きていかざるを得ない、福島子どもたちとつながり続け、かれらを見守り、寄り添おうとしてきた「こらっせ」の10数年の活動を、写真やパネルで参加者に見てもらっています。

● 東日本大震災・復興祭り in 神奈川

「復興祭り」は2013年からスタートしました。「生活クラブ生活協同組合・神奈川」を中心にネットワークする団体や東北の生産者が「ともに生きる」「復興」「脱原発社会」の志をかかげ、つながり続け、あらたな出会いと再会を生み、人と人とのネットワークの拡がりをつくっています。東日本大震災・福島第一原子力発電所事故から13年が経ちました。被災した地域ではインフラ整備が進み、福島県では帰還困難区域の解除も進んでいます。しかし避難先で生活再建している住民や帰還後の住環境に不安を持つ住民も多く、未だ故郷に帰れない現状がある事も事実です。また、成長した子どもたちのあらたな健康被害もおきており、取組が必要な課題となっています。

「こらっせ」は第一回イベントより参加呼びかけをいただき、毎回参加し、会場ブースやテーマステージでも活動紹介をさせてもらっています。さらにおまつり参加団体の収益金の一部も活動応援金として毎回いただき、ありがたく使わせてもらっています。

● 「311子ども甲状腺がん裁判」に賛同

2022年5月26日、東京地裁で「子ども甲状腺がん裁判」の第1回口頭弁論が開かれ、2024年9月まで公判は11回を重ねています。子ども甲状腺がん罹患した7人の若者が東京電力に損害賠償を求めて提訴したのです。勇気ある若者たちを応援しようと、毎回、約200人の傍聴希望者が傍聴券を求めて列を作り、「こらっせ」も支援ネットワークの賛同団体となり、第1回口頭弁論から参加しています。

この裁判の争点は、子ども甲状腺がん発症の原因は原発事故による被ばくであるかどうかということです。被告である東京電力はUNSCEAR(国連科学委員会)報告書を拠り所に、甲状腺がんは被ばくのせいではないと主張しています。一方原告側は、現在、370人以上の子ども・若者が甲状腺がんを発症しているという現実をもとに、多数の疫学の論文に言及しながら、UNSCEAR報告書などの間違いを指摘しています。そして、裁判のもうひとつの柱は、原告たちの声を裁判官に聞いてもらうことです。原告全員による胸をうつ意見陳述がおこなわれました。

